

つたと。戻っていただくわけにはまいりませんか」

徳本は、そこではじめて身をこわばらせました。

「……どうやって、ここが」

「いや、偶然です。うわさを聞きましてな。戦を避けるように各地を巡る、気弱な医者がいるらしいと」

徳本はちよつと笑いました。

自分のうわさがあんまり威勢のいいものではないので、自分でおかしくなったのでしょうか。

「大変申し訳ありませんが」

徳本は穏やかに微笑むと、すまなそうに頭を垂れました。

対する侍は、じつとその様子を見つめています。

「確かに私は気が弱く、頼りないとよく言われます。少し前までお城で侍医をしていたと言っても、誰にも信じてもらえないのです。戻ったとして、お役に立てるとはとも思えません。このまま見過ごしてはいただけませんか」

趣海坊は背中の荷を背負い直しました。

暗闇の中で、息を殺していたふたりがじりじりと進むのを、目の端で認めます。徳本が何を言おうと、あちらが引き下がる様子でないことは明らかでした。無理やりにも連れ去ってしまおうというのです。

一方徳本は、あとふたりが息をひそめているのに気付いているのだかいけないのだから、能天気には笑いました。

「こんなところまで来ていただいたのに、申し訳ない。時

間をくだされば、殿には私から文を書きましよう。それだなんとか帰ってはいただけませんか」

男たちが、光の届かないぎりぎりまで距離を詰めました。

もう、のんびりしている場合でもないでしょう。趣海坊は腹をくくりました。そして、ふつと息を吹きました。

真つ暗闇の中で煌々と照っていた提灯の火が、ふつつりと消えました。徳本が驚いて目をしばたたくまに、右と左

から、男たちの叫び声が短く響きます。

笠をつけた侍の「どうしたっ」という声に、むなしくも

返事はありません。徳本も目を白黒させ、わけがわからずに立ち尽くしています。やがて、とろりとした火が徳本のすぐとなりで燃え上がりました。

趣海坊はキセルに火をつけると、煙を含んで空いっぱい吐き出しました。それから提灯に火をうつすと、明かりに照らし出された侍と目が合いました。

途端に、みぞおちの裏の辺りがぞくりとしました。

趣海坊は次の動きを決めていました。

徳本の胸ぐらをつかみ、すたこらと逃げ出したのです。人並みの足で走ったので、侍も引き離されぬように追ってきました。さすがに武人は徳本とちがいがい、普段からきちんと体を鍛えているようです。

そうはいつても、相手は人の子。向こうが疲れて音を上げるまで、こうして走り回ろうか、と趣海坊がぼんやり考